

編輯室の内外

燒跡に建てられたバラツクの編輯室、風は誰に遠慮したものが一向室内に轉んで來ない、風に引き換へて遠慮すれば可いのに編輯に當つて居る田中ロンク法學士が、大きな聲で其の綽號を逆にした愚論を飛ばせば、小兵衛がまた饒舌りだし、蒸し暑い室のなかは一層メートルが上るばかり、寶亭の安物アイスクリームに舌鼓を打ちながら、萬年筆を走らして居るのが此頃の編輯室の近況である、智能労働者が手の労働者と化した心地がする。

雑誌の行間に餘白を設けよとは、編輯子が屢々耳にする所だつた、最も強く主張したのは、前新潟縣土木課長の松浦入道であつたが、老人ばかりが讀む雑誌で

ない、最小限度の紙数を以て最大の効果を

を收める積りで九ポイント二十行としたのであつたが、編輯子此頃トウ／＼老境に入り、一と先入道連の意見を容れて十六行雑誌に變更した、讀み易くなれば此主義で行きたい、併しながら編輯同人が暑さに怖へて骨惜みをするのでない事だけは、諸彦の諒解を得て置きたい。

編輯の方針に就ても、同業新聞記者連は軟派でやれと主張するが、雑誌が雑誌であつて自然主義の小説を登載することもある、夫れかと言つて数字を羅列して技術のみの要求を充すことも出来ない、遂に硬軟折衷主義で編輯して居るのであるが、何やら協會が発行して居るやうな會報的編輯はいやだし、餘り感心しない編輯方法ではあるが、他に良い智恵

もあれば貸して貰ひたい。

懸賞で募集した論文は随分應募者が澤山あつて、大に傾聴すべきものも尠くない、審査は嚴密に行はれ幹事が下調査をして、採點で理事が之を複審査して大體決了して居るが、理事會に附議した上で發表することゝ爲つて居るから、懸賞を貰ふものと期待し暫時待つて貰ひたい。

道路に關し生じた大小の事件を、批評紹介したので、曩に地方に通信員を置かれたが、地方からの通信は至つて尠く編輯子の頗る遺憾とする所である、意見を吐いたり勝手自慢を吹聴するのも炎暑を忘るゝ手段として必ずしも悪くはない、涼しいものなりと暑いものなりと一向差支はないから、大にメートルを上げて銷夏の方法として貰ひたい。(た)